

同人作品

帰省 秋山義仁

コロナ禍で九州弁が幅利かす大宰府外人は見ず

参道に蝉の亡き殻見上げれば幹つかむ蝉の脱け殻琥珀色

故郷の色付き稲穂妻に出す家頼む犬頼むよ元気でね

旅出れば地方紙買って御悔やみ面みんな気張って生きてきたんだ

義姉八八才骨折入院老健暮らし表情少く無口になって

「土橋」とふ繁華街消え駐車場に店消え友消え見たくなかった

友嘆くプーチン禍で材木高騰だから皆伐放置何てことを

四連の眼鏡橋あり渡れば大きな家敷氷室さん家だ

八^ヤ女^メの奥星野村は山^{ヤマ}脈^マの中長音の滝には蝶鮫棲う

阿蘇外輪山の共同墓地に陽はかげる墓碑銘に平成はなし

クニ^{クニ}サキ^{サキ} 国東の友が失明緑内障八〇年見たからもういいよ感謝だよとふ

若^ハ戸^シ大橋見上げフェリーで渡る洞海湾煙は見えず広がる住宅地

わたしの軍師 石邊綾子

短パンの素足はやぶ蚊の餌食です見かねてそつと痒み止め置く

あんぱんと珈琲片手に戦略を授けてくれるわたしの軍師

ほんのりとグラスに残し去ってゆくきみの煙草と軽い屈折

寝過ごして小田原駅まで行きましたと朝のメールは爽やかすぎて

シニカルにばっさり論破するきみは黒いマスクの月光仮面

このたびはマイナーな歌をとりあえず詠んで手向けるパトスの誌面

辛口の一献ふくみひさかたの愚痴がこぼれる遺影の前に

いっばしの口利く娘を嬉し気に肴にしつつ父の晩酌

ふるさとを通り過ごして出張の目的地に着く 次はまたいつ

青春を過ごした国の君主逝き時代がひとつ終りを告げる

比ぶれば日がな一日インスタの意味ないリールと沈む夕日と

泣きそうな犬がいつびき今どきの「映える」カフェーで座っておった

朝 井上省吾

朝日には希望の光キラキラと全てを照し力与える

輝きて朝露おびる草の葉の何と美し生きる喜び

自然の美心に響くこの感じたただひたすらにじつと見とれる

雨戸開け外の明りを部屋に入れすみずみにまでさつと見渡す

そよ風が開けた窓から部屋の中寝起きの体そつと過ぎ行く

朝日の出近くの木々の間から顔をのぞかせ全てを包む

秋の朝涼しい風が身を包む胸を広げて深呼吸する

気持ちよく朝を迎えて身も軽くあれやこれやと思ひめぐらす

大好きな朝を迎えて一番に気付いたことを大切にす

一日の始まる朝が大好きだ希望に満ちたこの日を生きる

三才と百才 熊谷恒樹

マスクして衝立越しのもどかしさ一〇一才の叔母の見舞は

赤いクツ買ってもらったと見せに来る隣家のシホちゃん今年三才

ヤツデ枯れたり 甲村雅俊

ゆくりなく気温が下がり早生みかん食へば一足先に冬へと
わが部屋のヤツデ枯れたりヤツデには魔除けの力あるといふのに
なぜ噛むか噛むのをやめてほしいのにわが飼ひ猫は噛むのをやめず
さみしさに堪へられないと思ふ日も仏は君とともにありたり
脱け殻を残していつかこの世から蟬のごとくにわれら去るべし
夢のごとく月日は過ぎる速くなる時の流れに運ばれてゆく
二年ほど休みましたが勉強を再開したり性懲りもなく
秋来ぬと目にはさやかに見えねども夜の通りを車少なし

岸上大作に寄せて 花井 和

冬の夜に恋と革命に死んだという岸上大作瘦せた肩口
遠い死者の歳を数えてみる遊び八十三歳は同時代人だ

アンポなど知らないトウソウ流行ってない六十年後の答え合わせ
歌っても恋も革命も成りはしない世界は歌でできていないから
降るほどの流星群は誰の無念岸上の分も幾つかあろう
小さな字の長い日記と短い年譜岸上大作そこに君がいた
ただひとりの愛も得られぬその無様あるいはそこに僕もまたいた
姫路文学館の中階段裏 歌は今でも息づいている

最高の笑顔 氷室敬子

かつてなる自己判断狂っているジャガイモの芯こんなに固い
国道の一号線沿いに刃物屋の店主の顔をしばらく見ない
排水管の詰まりはないけれど長年のたばこの吸い殻山となりいる
ひとの名が出てこないいくどとなく携帯で確かめいる簡単な名なのに

ボウアイス何本食べれば気が済むかひやひや夏もいつてしまったのに
看護師の誉め上手は最高の笑顔つくる幸せをなす

移行 本田洋子

一鉢のペンタスとふ赤い花 日照りに負けず満開となり

赤い花一枝切りて瓶に挿す 暑さの中で忘れ居たこと

知り合いも娘一家も皆陽性 感染力の猛威恐るる

キッチンのいつもの椅子にぼんやりと 夏の終りの白い風入る

吾れ一人野菜を炒め肉炒め みーんな合わせて焼きソバパーティー

ツクツクの夏が惜しいと鳴く夕べ、コオロギたちのオーケストラが

密やかに賑やかなりし夏行きぬ 夕べの十五夜美しきかな

猛暑ゆえベリーショートにした髪の毛 ようやく伸びて夏も行くなり

コーヒーとトマト朝食午前四時ペールギユントの「朝」流れ来る

高校の孫と電話で一時間 悩み相談何でもござれ

王冠は棺の上に輝きて 大輪のバラ終いに散りけり

一目合わむ女王を慕う人民の ひとたみ 追悼の列七キロ越えし

彼岸花台風襲来にも忘れずに 茎を伸ばして知らぬ間に咲けり

朝まだき空に輝く星一つ 金木犀のかほり香ぐわし

オレンジの金木犀の風受けて 両手開けば鳥になりけり

をり取りてはらりと重き薄かな ススキ 神奈月には よく似合う俳句

わたしやあ、冬の暮らしが好きだよと つぶやきながらカーテンを引く

愛車との 正木りえ

愛車との出会いと別れ再会も夢ひとすじのドラマなりけり